法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-19

〈書評と紹介〉服藤早苗・宇佐美ミサ子著『西さがみ女性の歴史 : 原始・古代から現代へ』

青木, 美智子 / AOKI, Michiko

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
73
(開始ページ / Start Page)
64
(終了ページ / End Page)
68
(発行年 / Year)
2010-03-24

Hosei University Repository

と、永原和子氏（元総合女性史研究会代表）が推薦文を寄せている。

本書の構成は次の通りである。

第Ⅰ編　原始～近世の女性

第一章　古墳時代までのあゆみ

第一節　土偶と石棒

第二節　稲作の始まり

第三節　古墳時代

第二章　古代

第一節　政治と女性

第二節　性愛と結婚

第三節　家族と働き

第三章　中世前期

第一節　政治と女性

第二節　性愛と結婚

第三節　家と財産

第四節　旅と遊女

第四章　中世後期

第一節　大名や武士層の政治と結婚

第二節　庶民層の政治と結婚

第三節　家と相続・妻役割

第四節　労働

第五節　遊女と芸能

第五章　近世

第一節　政治と女性

服藤早苗・宇佐美ミサ子著

『西さがみ女性の歴史―原始・古代から現代へ』

青木　美智子

女性たちがどのように時代を生き、生命を育み繋ぎつつ地域を変えていったのか。―地域女性史の研究者にとって、当該地域の女性たちの姿を通史として描くことは、究極の目標であろう。しかし、史料的制約が大きいなかで時代を通観し、時代の流れのなかに地域女性の歴史的具体像を位置付けつつ通史として纏め上げることは至難の業である。それを、本書はみごとに成し遂げた。

宇佐美ミサ子氏は近世史専攻。交通史・地域史に加えて女性史に三〇年余のキャリアを有する屈指の研究者であり、長年、小田原女性史研究会で活躍されてもいる。服藤早苗氏は古代史専攻。女性と子どもを常に念頭に置きつつ家族史・女性史およびジェンダー分析等に優れた研究実績をもつ有為の研究者である。本書は、お二人の共著という形で刊行が実現した。中学生・高校生から一般という幅広い読者層を想定し、わかり易く楽しく読める「やさしい女性の歴史」となるよう企図されたという。「地域に暮らし、地域に働き、地域を変えた、西さがみの女たち。そのさわやかにたくましい歴史を、いきいきと語る書、その姿がいま明らかに！」

Hosei University Repository

第二節　武士の結婚・離婚
第三節　庶民の結婚
第四節　離婚
第五節　旅と女性
第六節　宿場の飯盛女
第Ⅱ編　近・現代の女性
第一章　近代化と西さがみの女性
第一節　関喜久子が見た明治維新
明治の御一新とある「刀自」の日記
第二節　学ぶ心―教育に思いを馳せる女性たち
女も男も学校へ／女子教育の先鞭となった私塾と女教師の誕生／良妻賢母と女学校の開設／実学教育と新名学園の創立
第三節　明治政府の公認した売春制と廃娼運動
マリア・ルース号事件と娼妓解放／貸座敷制度とにぎわう花街／廃娼運動ひろがる／小田原における廃娼の実態
第二章　大正の「明」と「暗」
第一節　大正デモクラシーと女性―自立を求めて
「民衆」の誕生
第二節　大地震で潰れた町や村
マグニチュード七・九／小田原町の惨状／流言蜚語のとびかう中で／御真影を守り犠牲となった女教師
第三章　昭和という閉塞の時代を迎えて
第一節　不況の嵐に動揺する人びと―社会主義の台頭
暗い昭和の世相／小田急の開通／社会主義運動と伊藤ヒデの軌跡
第二節　戦争への序曲―女たちの戦争責任
第三節　婦人会の成立と展開―処女十訓・嫁十訓
日本弘道会と一丁田婦人会／活気づく婦人会の動向
第四節　愛国婦人会―女たちの戦争協力
愛国婦人会の動き／民衆と共に歩む女医田口安起子
第五節　皇紀二千六百年と小田原の動き
第四章　アジア・太平洋戦争
第一節　国防婦人会―「兵隊さんは命がけ」、「私たちはたすきがけ」
小田原町での動き／地域における活動
第二節　戦時動員された女学生たち、疎開する学童
学徒動員／横原恵美子（旧姓林）の証言／学童疎開／母との楽しい会話／父からの手紙
第三節　「生めよ殖やせよ」の思想
第四節　貧しい食生活と空襲の日々
第五章　敗戦と女性
第一節　戦いは終わった―女性たちの敗戦
一九四五・八・一五少女の日記から／混乱状

Hosei University Repository

況の中で

第二節　耐乏生活に一工夫

第三節　女性の政治参加―輝く男女同権

女性議員の誕生／小田原市会議員の選挙

第四節　日本国憲法の誕生―世界に誇る三つの原理

新憲法と女性

第五節　労働運動と女性―女性解放に力を注ぐ千葉菊子

戦後の女性労働運動

第六節　民主主義教育―男女平等

第六章　高度成長期

第一節　村は変わった―女たちの生活改善運動

第二節　人口政策と女性たちの動向

第三節　男女共同参画と小田原のとりくみ、そしてこれから…

構成から明らかなように、第Ⅰ編は原始（旧石器時代）から近世までを、第Ⅱ編では近・現代を扱っている。第Ⅰ編については構成からは内容が窺いにくいので、概要を紹介しておこう。

西さがみ地域の歴史は、早川・酒匂川の流域や相模川岸から始まる。第一章では、出土した旧石器から原始の暮らしに思いを馳せ、土偶と石棒に象徴される縄文期、稲作と戦（いくさ）が始まった弥生期から大型古墳が築造されるようになる五世紀頃までを概観している。そこでは男女が対等なかたちで生活を支えており、やがてクニが形成され支配層が出現しても、いわゆる「政治」にかかわる王や首長に性差はみられず、世俗的政治・祭祀・外交・軍事・生産などすべてに渡って男女が対等であった。

第二章（古代）になると、「政治」がしだいに男性優位へと変化する。しかし奈良朝までは、女帝や政治的任務にかかわる女官にみられるように、中央政治の中枢に女性が存在した。相模国から提出された文書から、光明皇后が天皇と並んで政治の権限を発揮した「皇后宮」の存在が確認されるという。

庶民層の暮らしと性愛については、万葉集にある足柄・相模地方の歌謡から、男女が心性を同じくする対等な社会であったことを読み解き、小田原永塚遺跡の竪穴住居群を例にあげて古代家族の特徴を推量する。『続日本紀』『延喜式』や防人歌にみられる相模女性は、財産権を有し、働き者で頼もしい。

第三章（中世前期）。女性史の時代区分では、九世紀末～十世紀初め頃からを中世萌芽期（または成立期）とする。この時期、女官の役割は天皇の私的生活への奉仕に限られ、皇后は後宮につかえる女性たちの統括者に過ぎなくなる。しかし夫である天皇が崩じたあと、母后は後見力を遺憾なく発揮できた。母后の権限を土台として母后の父や兄弟が権力を行使したのが摂関政治であった。

政治が男性優位になるにつれて、性愛や結婚にも変化があらわれるが、女性の立場の弱化を、歌人相模（相模国司大江公資（きみすけ）の第二夫人）のいきざまから描いている。

十世紀以降になると貴族層から「家」が成立し始め、やがて武士層にも及ぶ。「家」は家長とその妻子を中核として家業経営をおこない、家司や従者・女房・下人等を包摂した組織集団である。

Hosei University Repository

十二世紀には下級官僚から武士層まで広く家業が成立し、男子が「家」を継承するようになる。なかには相模国早河庄一得名を所持した摩々局（源義朝の乳母・山内首藤経俊の母）や相模国大友郷地頭職郷司職にあった深妙（大友能直の妻）のように、財産を所有して家業を経営し御家人として活動した女性たちもいた。しかし、後家の所領権はしだいに縮小され、親権も弱まっていく。

西さがみ地域の特色の一つは道である。同地域の南部を横断する東海道は京と鎌倉の往還道として賑わい、女性の旅人も多かった。足柄峠の麓や酒匂宿には、旅の安全を祈願して神に歌舞を捧げる教養高い遊女たちがいたという。

第四章（中世後期）の項では、従来政略結婚の道具とみられていた戦国大名の子女が、実際には外交官的役割を果たしていたことを黄梅院（信玄の娘・北条氏政の妻）や桂林院（氏政の娘・武田勝頼の妻）の活動から位置付ける。武士層の所領は息子が単独相続するようになるが、女性には化粧料や夫没後の動産が独自財として保持されたことも北条氏康の文書で明らかにしている。庶民層については、小田原城の籠城作戦にみられるように男女とも村や地域を守るために戦っていたことが知られ、北条氏の文書からは妻子労働の重要性などがみてとれるという。

一方この時期には箱根道が本道化することで、小田原宿が街村的景観を呈するようになる。町のにぎわいの中に芸能民や売春を主とする遊女たちの姿もあった。

第五章（近世）の「政治と女性」の項は小田原藩とかかわりの深い春日局を中心に語られ、「武士の結婚・離婚」では小田原藩主稲葉氏や大久保家臣団に関する史料分析がなされる。「庶民の結婚・離婚」では、村送り状の分析から西さがみ地域の通婚圏・婚姻年齢・相続・結婚式の日取りなどの特色が明らかにされる。庶民にとっても、結婚は「家」の維持・存続と生産性向上を希求する手段となり、女性の立場は弱かった。

近世になると東海道を旅する女性も数を増す。箱根・矢倉沢・根府川の関所改めや酒匂川の川越えの困難さはあったが、商人の妻娘、名主の妻、文人など上層女性のなかには自由な旅を楽しみ、西さがみ地域の景観や旅の印象を記す者も出てくる。一方、箱根宿には享保三年から、小田原宿には文化三年より飯盛女の設置が認可され、天保期の小田原宿では約八〇軒の旅籠が飯盛女をかかえたという。飯盛女とは客への配膳サービスを建て前としながら売春を強要された者たちで、多くが貧しい農民の娘たちであった。西さがみ地域の人びとは他地域同様、階層差や男女の性差別の矛盾を抱えつつ、幕末維新の変革の渦に巻き込まれていく。

以上、第Ⅰ編は「政治」「結婚」「旅」をキーワードとし、所有や性愛における男女の対等な関係がしだいに男性優位に傾斜していくなかで、西さがみ地域の女性たちがどのように生き抜いてきたかを、女性史の研究成果を取り込みつつ平易に描いている。

第Ⅱ編は、ウエイトを近現代に置くという企画から、分量的に全体の三分の二近くを占める。しかも「当地域からの発信を強調する」ために宇佐美氏が執筆を担当し、地域資料を存分に活用して内容的にも豊富である。前述の「構成」でおおよその概要が把握できると思われるので、第Ⅱ編については資料の扱いや手法の

Hosei University Repository

特徴について触れておきたい。

第Ⅱ編第一章は小田原城下の質屋関善左衛門の母・喜久子の日記で始まる。関喜久子の日記は、明治維新という変動期の社会の動きや民衆の動向を「女性の目」で客観的かつ冷静に記録しているという。また第四章・第五章では女学生の日記や学童の手紙が時代の証言として重要な役割を果たす。そのような女性の日記・学校日誌・雑誌・新聞記事・女学生の日記・学童の手紙などの史資料に加えて、随所で「聞き取り（聞き書き・語り）」資料が活用されている。「史料では見えてこない事象を「語り」という人びとの記憶の営為によって追体験し、地域女性の歴史の再構成を試みるという手法」をとったのである。「地域に残された資史料・文献には女性がすっぽり抜け落ちてしまっている部分も少なくない」ため、それを補う意図があったとされるが、「語り」が実に効果的に用いられているところに第Ⅱ編の特徴がある。

たとえば関東大震災時の朝鮮人暴動の流言蜚語に「竹やぶの竹をとんがらして身を守った」と言う少年。昭和前期の小田原地域で女性の自立や女性解放を唱えて活躍した伊藤ヒデの「体には、二〇年以上前の拷問を受けた痛々しい傷跡が残っていた」こと。戦時中の多子化政策のなかで四人の子を産んだものの「あと一人産まなければ軍国の母失格と強力な女性ホルモン剤オバホルモンを飲みました」と語る既婚女性等々。「語り」によって臨場感のある叙述で読者を文中に引き込むと同時に、本書の背後にある「同時代の体験者や多くの地域の人たちの協力」が地域女性史としての本書を厚みのあるものにしている。「語り」は聞き取る側での時代考証（記憶違いのチェック）が必須だが、「歴史的な貴重な証言であり、同時代に生きた人びとの真実の証でもある」。そして何より、著者自身が、「語り」の中に地域の女性たちのいきいきした真実の姿を見出し深い感銘を受けつつ執筆したという事実が、本書の勢いとなっている。子どもの頃小田原遊郭の楼閣で遊んだという宇佐美氏のエピソードも、飯盛女を研究テーマとされる氏の原点が思われて興味深かった。

一読後最も印象に残ったのは、原始・古代から連綿と続く西さがみ女性のエネルギーであり、著者が最後に投じた「ほんとうの意味で男女平等とはどういうことか」という問への思いであった。たとえば近代さがみの運動体の中で、国防婦人会は人道的女医・田口安起子をも小田原支部役員に取り込んだ「巨大な女性集団」であったが、平等に「誰でも入れることが魅力」だったという。女性たちの戦争責任とどう向きあうか―という課題に加えて、「平等」のもつ意味は重い。教育の男女平等がほぼ達成されたとみえる現代、高学歴女性の専業主婦願望の強さが格差社会や貧困スパイラルと深く関わっているともいう。「男女平等」とは、不平等を認識した女性たちの共通の願いではあるが、それは決して最終的な目標ではないはずである。平等を達成して「どうするのか」「どこへ向かうのか」、具体的なビジョンを描く時期にきているのかもしれない。女性史を学ぶ者として多くを考えさせられた。

本書は今後、地域女性史執筆の良きモデルになると思われる。

（二〇〇九年五月刊　A5判　二三九頁　定価一八〇〇円＋税　夢工房）